人間を取り巻く〈四つの「間」〉について

「時空」の制約と把握の中の現代人

時間・空間・人間・世間には、「間」（ま／あいだ）という漢字が共通する。この四つの熟語から〈地元力〉を発見したい。

まず「時間」とは、ある事象の始まりから終わりまでの時の流れ（間隔）をいう。その間隔の大小（長短）を、1秒や1分や1時間と区分し、さらに1日や1月や1年とされるが、これも時間の範疇である。さらに1世紀も同様である。こうした時間の経過における各単位を適宜に使い分けて、私たちは、行動の繰り返し・連続性を、毎時や毎日や毎年などと表現する。あるいは、来月はとか、来年こそはとか、のように再起や新規一転を祈念することもある。さらに、年内にはや四半世紀のうちにはなど、行動達成への目標として時間設定する場合もある。人との出会いにおいては、いつどこで、というように、時間と（次に述べる）空間を指定する。以上のように、「時間」は、私たちの行動を規制する……。

「空間」は、私たちの行動の範囲を指定し規制する。東西南北という方位と共に、その2次元的広がりを指定する。市内や県内などのほか、地域や地方、さらに国や世界などという広い空間を規定したり想定したりもできる。また、地上や地下など高低も対象として規定し、あるいは想定させる。大気圏や成層圏、さらには宇宙という空間もある。逆に、地下や海底など、さらには地殻など、地球内部に向かうこともできる。私たちの行動や思考の範囲はこうして空間とともに時間においても広がりを持つ。

私たちの暮らしや生活は、時間と空間の中にある。暮らしはLivingであり、“ing”がついているので、〈時間との関わり〉が深いと言える。一方、生活はLifeであり、時間についての関わりよりは、〈暮らし向き〉への関心が強いというように、時間と（次に述べる）空間を指定する。以上のように、「時間」は、私たちの行動を規制する……。

「田舎暮らし」や「消費生活」というのはしっくりするが、「田舎生活」や「消費暮らし」はなじまない。

私たちの暮らしや生活では、活動の場所があり移動を伴うことが多い。もう少し強調していえば、私たちは実はいつも空間のなかを選択して活動しており、今日ではもはや明確に認識される移動行為――クルマやケータイで身近なGPSよって位置認識される空間移動を行っている。

西周が「個人」の訳出に手間取ったわけ

このように時間と空間は、物理学で「時空間」と呼ばれるように、二元一律である。その中で、私たち「人間」は暮らし生活し、活動している。「人間」は、一人では生きていけない存在である。ゆえに「間」こそが深く関わっている。私は母親から生まれたが、その誕生においては、前述した「時間」と「空間」が指定された。出生届けにあるように、生年月日と出生地、そして両親の存在がある。こうして、私の存在は個人ではなく、両親という他の人の存在があっての関わりであった。そして、兄弟や姉妹、あるいは家族や血縁・地縁など、「間」としての関わりや繋がりを否定できない存在である。存在について強調すれば、「人間」は英語では、human beingと呼ばれる。これは他の生物と比較して特に人間の存在を強調する呼び方である。それは人と人の「間」よりも、むしろ人間以外の生物の存在について意識させる呼称と言えよう。

最後に「世間」について考えよう。この言葉は、日本での独特な「社会」の一側面である。しかし、明治になってから英語のsocietyについての訳語が「社会」とされたので、実は日本では「世間」の方が長い社会のとらえ方である。訳者は、西周であるという。これと関係する「個人」もindividualの訳であるが、社会と個人は、「世間」を考える場合の重要な概念となる。西周はその調整のため、「個人」の訳出は「社会」の訳出の5年後になったという。日本古来の「世間」においては、「個人」という概念がなかったので、慎重になったようだ。現在では、「社会」や「個人」という言葉には違和感がない。むしろ、「世間」という言葉は、ある制限された地域における「社会」の一側面をとらえるような意味合いとなっている。

以上のように、ここで取り上げた「時間・空間・人間・世間」には、それぞれに意味合いがあるが、実は横断的な繋がりがある。それは、「人間」という存在こそがその主体者だからである。その代表格としてとして紹介したいのが、「寅さん」である。その詳細は、新年での紙面に待つことになる（to be continued）。

「人間」を探求した18世紀フランス『百科全書』の扉絵

地元力発見！㉖

佐藤建吉　「洸楓座」代表

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事